

# “常識”や“あたりまえ”を疑う ～常識の殻を破って新しい領域を広げる～

アプト技研 大島清次郎\*

## プレス加工を取り巻く社会構造の変化と 私たちの対応

日本は他国より早く高齢化が進み、超高齢化社会がすぐ目の前にきている。担税人口が減少する中で製造業の従事者も30年近く減り続けている。モノづくりという仕事は低賃金の地域を求めて移っていくことは普通のことであり2002年から何回か図1のようなモノづくり移行のモデルで説明してきている。つくり方が比較的簡単で大量に販売される民生品から移行していくことは現在も

\*（おおしま せいじろう）：代表  
〒399-3303 長野県下伊那郡松川町元大島 3052-1  
TEL/FAX：0265-36-3256

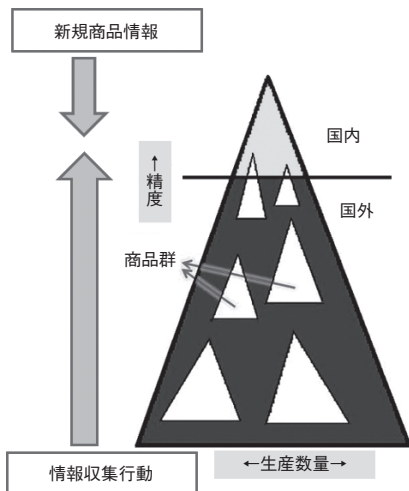


図1 モノづくり移行のモデル

変わっていない。また製品機能に占めるソフトの比重が大きく、一度に大量のコピーができるような品物は初めから日本での製造が予定されていない。このように構造が変化していく中では次のような問題が起きている。

○各企業におけるキーパーソンの高齢化とリタイア（高齢熟練者と未熟若年層という従業者の二層化が起き、技術が伝わらないとか新規開発の粘りがないなどの問題が起きている）

○微細でかつ高精度な品物の加工は以前から日本の得意技であったけれど、要求される加工品はこれまで以上に高精度でかつ中・大物の品物に移ってきている。これに伴って設備が大型化・高精度化されてきているが、出遅れの企業には設備や人的投資できる力がない（小型の高精度プレスを持て余しているところもある）

○何年も先の計画を立てることが難しく、また新規にこの業界に入ってくる若者も少ない。その結果、過剰負荷と非正規化で若年従業者が将来計画を立て難い

結果として大きい型・高精度型・高難度型をつくれる企業が減少し、以前ならつくれた型が現在の人員構成・技術レベルではつukれないということも起きている。モノづくり（量産）のあるところで、目の前の問題を解決しながら技術は育つので、量産がなく問題もないところでは技術は育たない。

また試作や少量生産だけでは多くの人が食べていくには足りない。どんな環境でも力のある者は